

認知言語学の国際共通英語への教育応用の考察 ——問題点を中心に——

田 中 実*

Consideration on an Application of Cognitive Linguistics to English as an International Language About its Problems

Minoru TANAKA

要 旨

認知言語学の研究成果の積み重ねを踏まえて、近年認知言語学の英語教育への応用が検討されてきている。ところが、同様に近年、英語教育の分野では英語そのものの捉え方に大きな変化があり、学習の対象とする英語が従来の英米の標準英語だけではなく国際共通語としての英語が注目されるようになってきた。後者を英語教育の対象とする場合、認知言語学の応用には注意が必要である。というのは、英語の認知言語学研究は当然ながら英米ネイティブ英語の研究であるからである。認知言語学の国際共通英語教育への応用に関して、問題になると考えられる領域の例として語彙、表現の仕方、文法、事物の捉え方、比喩を取りあげた。また、認知言語学の知見が有益だと思われる領域の例として、基本語彙、多義語、イディオム表現、名詞の可算・不可算の基本的意味、準動詞を取りあげた。今後、認知言語学を国際共通語としての英語の学習に応用する場合は、こうした点を十分考慮して行われなければならない。

キーワード：認知言語学、認知意味論、国際共通英語、応用、英語教育

1. 序論（目的と背景）

認知言語学の英語教育への応用については、田中（2012）においても指摘した。ただそこでは、認知言語学を英語教育に適用した認知学習英文法それ自体に問題点があることを考察し

*准教授 英語学・英語教育

た。現在提唱，提案されている認知学習英文法が英語学習に本当に有効かどうかの問題である。具体的に指摘した点は6つあった。

教育的効果の観点から，

- (1) 文法の説明が長く，
- (2) 難しいことが多いため，これに対処できる学習者を選んでしまう。

内容的には，

- (3) メタファー・メトニミーの説明は自明すぎるが多く，
- (4) 従来からある説明が新たな認知的視点から説明かのように記載されていたり，
- (5) 不用意にコア・アプローチ（一つの形に一つの意味）を適用しすぎであり，しかも
- (6) 時には「なるほど」という説明がないこと。

本論では，その田中（2012）の「結び」で触れた「国際共通語としての英語」との関係に焦点を当てる。

認知言語学はかなりの発展を見せ，現在英語教育への応用が検討されている。時系列で行くと，まず岸本（2003, 2004），松本（2004），鈴木（2004, 2005），森本・堀江（2006, 2007），千葉（2006）で研究発表されている。そして日本認知言語学会第7回大会（2006）では，「認知言語学と言語教育」（岸本・田中・李・岩田，2006, 2007）というテーマでのシンポジウムが開催された。さらに同大会のテーマつき研究発表として「認知言語学と外国語教育」（岸本・田中・李・岩田，2006, 2007）という題目が取りあげられている。その後，小野・高野・アレン・マーナー（2007, 2008），今井・森山・荒川（2009, 2010），高橋・金子（2010, 2011），今井（2010b, 2011a），今井（2011b, 2012），長（2011），今井・宮浦（2011）というように研究発表，セミナー発表が続いている。ただし，認知言語学関連以外の英語教育研究発表と比べるとその数はまだ非常に少ない。それでも徐々にこの分野での関心が高まりつつある。

このように認知言語学の英語教育応用が進みつつあるが，その一方でその応用に根本的な矛盾があると思われる。それは，英語教育が対象とする「英語」である。認知言語学の対象とする英語は当然ながらネイティブの英語である。そしてそれはネイティブの「英語らしさ」の研究である。ところが，現在は英語教育が対象とする英語は必ずしも「ネイティブ」の英語ではない。「らしさ」にこれまでのような重点が置かれるわけではない。時代はそういう時代ではなくなりつつある。ではどういう英語が対象となりつつあるのか。国際共通英語である。それは言語の異なる人々が互いにコミュニケーションをはかるためのものである。つまり，意思疎

通のためのものである。そのために英語を使用するからといって英米の標準英語の発音を性格に真似る必要はない。意思疎通のために基本的な文法能力は必要だが、「微妙な」表現スタイルまで必ずしも真似る必要はない。このことは、「ノンネイティブ」の数がネイティブの数を圧倒的に上回っているという歴史にかつてない状況にあってはよけいのことである。

このような英語は、海外では Kachru (1986, 1992), Crystal (2004), Jenkins (2009) などにより、日本でも鈴木 (1999), 本名 (2003) などにより提唱されてきている。そして、大学英語教育学会が第 47 回大会 (2008) において『グローバルな英語コミュニケーション能力とは一英語教育再考』というテーマでこの問題を大きく取り上げている。そこでは、Jennifer Jenkins 氏が “English as a Lingua Franca”, 矢野安剛氏が『英語のグローバル化とその教育』, Salikoko S. Mufwene 氏が “Global English” vs. “English as a Global Language”, そしてこの 3 者によるシンポジウム “What is Global English Communicative Competence?: Models, Standards, and Pedagogy for the Teaching of English in Japan.” がこの問題を特に論じている。さらに、大学英語教育学会第 50 回国際大会 (2011) でも、吉川・日野・松田・石川 (2011), Matsuda (2011) 及び Yano, Bianco, Park, and Honna (2011) による発表も国際共通英語をこれからの英語のあるべき姿として論じている。鳥飼 (2011) も同様の趣旨のことを述べている。

このような状況を背景として、本論では認知言語学の国際共通英語を対象とした英語教育への応用の可能性について検討してみたい。

2. 認知言語学の国際共通英語教育応用への根本的な問題点と可能性

2.1. 問題点：国際共通英語が対象となっている

認知言語学を英語教育に適用する場合における対象とする英語の問題である。通常の場合はもちろん外国語学おとすればその言語の母語話者の言葉である。つまり、英語なら本来の地のイギリス英語、さらに海を渡ったアメリカ英語となる。だが、現在はイギリス英語でもアメリカ英語でもない「国際共通語としての英語」が注目されつつある。だが、英語の国際性、国際語としての英語という表現はずいぶん昔から使用されている。日本では明治の時代から言われている。

ではそうした国際語としての英語とここでいう「国際共通語としての英語」は何が違うのか。従来の国際語としての英語は、英米の「ネイティブ」の標準英語をそのまま用いて、国際的なコミュニケーションの手段とした。したがって、学習の対象とするのはイギリス標準英語あるいはアメリカ標準英語である。では国際共通語としての英語とはどのようなものであるか。それ

は、互いに母語とする言語が異なる場面で、互に通じさせることができる、互いに意思疎通ができるという意味での共通語としての英語である。英米の英語はもちろん重要な参考対象となるであろうが、その英語がそのまま学習対象とはならない。

「国際共通語としての英語」の特徴は次のようになるであろう。

その特徴1：発音・アクセント

通じること、意思疎通が目的なのでネイティブの発音をそのまま真似る必要はなく、したがってその発音が目標になることはない。互に通じる発音・アクセントが目標となる。ネイティブの発音を真似る必要がないといっても、例えば日本人の日本語的な発音・アクセントがそのままでもいいわけではない。世界的に通じるような発音・アクセントの習得が必要となる。また、ネイティブの人もネイティブだからといって自分たちの発音をそのまま使っていていいわけではない。ネイティブの人もノンネイティブにわかってもらえるよう発音を修正する必要がある。例えば、ネイティブの人が日本にやってくる極めて英語的な発音をしていては日本のほとんどの人に理解してもらえず、足したい用事が足せないかもしれない。筆者の経験で、日本のものですら、例えばキリンビールのことであったが、極めて英語的な発音をされたためにわからなかったことがあった。

その特徴2：語句の表現

同じものを指しても、英米で、もちろんある限度内であるが、違いがある。さらに同じ英語圏でもオーストラリア、ニュージーランド英語でまた違いがある。つまり、国・文化がある程度異なれば語句の表現には違いが出てくる。したがって同じものを指しても、世界的な規模で英語が使われればそれだけ語句表現の違いが出てくる。このため発音・アクセントの問題とは異なり、全世界的に共通な語彙表現を求めるのは難しいかもしれない。ただ互いの意思疎通が共通英語の目的なのであるから、そうした語彙表現の多様性を縮小させていく必要がある。その場合でも、英米の語彙表現がそのまま採用されるというわけではなく、世界的に使用頻度が高く、ノンネイティブも含めた多くの英語話者に理解されるものが共通英語での語彙規準になるであろう。

また、ある文化に特徴的なものを無理矢理英米のネイティブの語彙で表現するのは適切ではないであろう。例えば、日本の「ソバ」は、*Japanese noodles* と英語に置き換えてみても、うどんとソバの区別はつかないし、それは「日本の麺類」という意味でしかない。それ自体が独特な麺類できちとした名前があること告げることが大事である。したがって、ソバは *soba*

であり、その説明の一つとして a type of Japanese noodles という表現が付け加えられるべきである。

国際共通英語としては語句の問題が一番の大きな問題となるかもしれない。

その特徴3：表現の仕方

例えば、*I went to Osaka by car last week.* と *I drove to Osaka last week.* どちらも文法的にはもちろん英語表現として何の問題もない。日本人の英語では日本語の表現の仕方からどうしても前者の方が多くなる。また、ネイティブ的には *I was there. Where were you?* となるところを日本人英語では *I went there. Why didn't you come?* となることが多いようである。同様なことは、あの無生物主語構文について当てはまる。日本人にとっての国際共通英語学習においては、何も *Our noisy neighbors kept us awake all night.* の表現の仕方を目的としなくても、まずは意思疎通のため *Because of noisy neighbors, we couldn't sleep well all night.* で十分であろう。いわゆる「ネイティブらしさ」は、国際共通英語学習においては目標にはならない。

その特徴4：文法

これは基本的なところは「ネイティブ」の英語に従っている必要があるだろう。上記の「表現の仕方」のように表現の仕方の違いにネイティブ性を目標とする必要はないが、どの場合でも基本文法的である必要がある。それはネイティブの文法である。だが、微妙なニュアンスの違いを表すような項目は重要ではなくなるであろう。例えば、*must* と *have to* の使い分けである。また、周辺的な変則的な文法については国際共通英語はずれていくかもしれない。例えば、*salmon, carp* などの複数形は普通に *salmons, carps* となるかもしれない。むしろ、このように合理化されていくであろう。

このような国際共通英語が注目される背景としては、いくつか考えられる。(1) World Englishes と複数形で呼称される様々な英語ブランドが成立してきた。(2) 英語のノンネイティブがネイティブの数を圧倒的に上回るという歴史的に例を見ないという状況に至っている。(3) 英語がネイティブとノンネイティブとの間で使用されるよりノンネイティブ同士で使用される場面の方が多くなってきている。(4) 英語を特定の限定された目的だけに使用するので学習の容易さが求められる、あるいは単純に多くの人が学習できるようにその容易さが求められる。(5) 英語母語話者、英米だけに異常に有利になってしまうことを避けることも背景にある。World Englishes という点では、ある特定のパターンを持った英語、例えばインド英語

がその地域である一定以上の人口を背景に成立しているからである。そうした英語は、非標準の英語として無視することはできない勢力を持っている。第二に、英語のノンネイティブの方がネイティブよりも圧倒的に多いということは、それだけでもネイティブの英語が規準とはなくなることは理解できると思う。だが、これをもっとわかりやすく、ある一人の英語のネイティブがノンネイティブの国にやって来たときのことを考えてみる。例えば、日本。ノンネイティブの話者がほとんどである。そのネイティブがアメリカ人として、駅周辺でトイレを探すとする。“I’m looking for a bathroom.” 日本人が何とかその英語を理解しても、多くの人は *bathroom* はバスルームつまりお風呂と理解するであろう。「いや～、この辺にお風呂はないしなあ～。変な奴だな、こんな所でお風呂探すなんて。」というようなことになりかねない。いや、*bathroom* はアメリカ英語でトイレを意味するんだ、と言ってみても、多くの日本人がそういう意味では理解しないのでどうにもならない。日本でトイレ行きたければ、少なくとも *toilet* という語を使う方がいい。もちろん、数だけで決まるわけではないが、数が多い方に合わせる必要があるのはこの例でよくわかると思う。

第三として、英語を使用する相手は必ずしも英語母語者ではない。むしろ、非母語話者が多い。アメリカ、イギリスに留学、あるいは仕事その他で滞在、移住している場合、英・米文学専攻、英・米の政治・経済、文化事情専攻ということであれば、英米的な英語が必要であろう。これは、従来の意味での英語学習の目的である。だが、例えばよくありうるケースとして、日本人がビジネス目的でインドネシアに行くとする。そこで英語を通してコミュニケーションする場合、英米的な英語が果たして必要であろうか。自分がアメリカ英語に通じ、アメリカの表現、ましてやアメリカのスラングをインドネシアの相手方に使って、理解してもらえなかった場合、こんなアメリカ英語がわからないのかと言えるだろうか。言語と文化は切り離せないと言うが、インドネシアの人とのビジネスで英米の文化、まして英米文学的知識は必要なのか、欠くことのできないものなのであろうか。「教養」という意味ではあった方が、人間の幅を広げるので、むしろ知っておいた方がいいが、ここではそれは別問題である。こうした非英語圏の状況では英語は、まさに共通語として、コミュニケーションのためのものとして機能している。

四つ目に、学習のしやすさの必要性である。先の、インドネシアでのビジネスでの英語の使用という設定で考えてみる。何もイギリス、アメリカで滞在、住むことを目的としているわけでない。通常は日本に住み、インドネシアでビジネスのため一時滞在とすれば、限られた範囲での英語が必要ということになる。英語で日常を過ごすわけでもない、アカデミックな英語は必要としないかもしれない、必要な語彙の範囲も限られることになる。こうした状況のために

「本格的」に英語を学習するというよりは、ビジネス遂行のための英語で十分であろう。もっとも、これは低レベルの英語で十分だと言っているわけではない。英米標準英語ある必要がない、何もかも勉強する必要はないと主張しているのである。

最後に、もしこれまでのように「イギリス英語」なり「アメリカ英語」を特に選択することになれば、イギリスあるいはアメリカが圧倒的に優位になってしまう。そのような状況を避けるためである。「英語帝国主義」とも関連する（大石（1990）、津田（1990））。言語的に我々は常に不利な位置に置かれ、支配されてしまう。ただ、英米語でなくても、どのような英語であれ英語を使えば、英語母語話者、英語を母語とする国々が圧倒的に優位になる。それでも、「国際共通英語」であれば、その学習のしやすさと、英語母語話者も非母語話者の英語に歩み寄ることが必要になるので、ある程度こうした母語話者優位の状況は緩和できる。

2.2. 英語認知言語学の国際共通英語への応用可能性の考察

英語の認知言語学はネイティブの英語を絶対的な前提としての研究である。それに反して、ここで取りあげている国際共通語としての英語はネイティブの英語そのものではない。認知言語学は、言語の説明になるほどという説明を与えてくれる。ネイティブらしさも説明してくれる。このような認知言語学は、先に示した特徴を持つ国際共通語としての英語の学習に役に立つのであろうか、学習をより効率よくできるのであろうか、それともネイティブ英語とは異なる特徴を持つゆえに国際共通英語学習には不向きなのか、こうした点を下記で検討してみたい。

2.2.1. 伝統文法はこれまで通り有用である

まず、認知言語学的な文法とは別に一般的な文法は英語を共通語として使用するのであるから当然ながら国際共通英語学習にも必要である。この点は、上記の国際共通英語の特徴4のところでも述べた。時制、相（完了・進行）、仮定法、関係代名詞、比較級、態、助動詞など、認知的な説明はなくても一般的な従来からの伝統的な文法説明があればよい。

2.2.2. 国際共通英語の観点から認知言語学と折り合わない点

語彙

語に対する感覚、語感についてネイティブの感覚を学ぶのは難しい。認知意味論などがその語感を説明してくれるかもしれないが、国際共通英語での同じ語彙の意味・語感はそれとは異

なることが多いかもしれない。つまり、同じ語彙でもネイティブとは違う語感で使っているかもしれないので、ネイティブの語感の認知意味論的説明はあまり役に立たない。例えば、認知的アプローチは *resemble, take after* の意味の違い、使い方の違いをよく説明してくれるが、もしかしたらノンネイティブ英語使用者の間ではこのような区別はなくなってしまうかもしれない。

表現の仕方

ノンネイティブ的	ネイティブ的
I went to Kyoto by car yesterday.	I drove to Kyoto yesterday.
I went to Fukuoka by plane yesterday.	I flew to Fukuoka yesterday.
I went there. Why didn't you come?	I was there. Where were you?

上記3つの表現ペア（本名他, 2012: 24）は、本来認知言語学的立場から取りあげられたものではない。だが、認知言語学観点からでもネイティブ的視点、捉え方として取りあげることができる。JACET 第51回国際大会において長・川瀬・大橋（2012）でも、認知言語学的な観点から英語らしいネイティブ的な表現が取りあげられていた。従来の英語教育であれば、上記3つの例では明らかに右側の表現に向けて学習指導が行われるであろう。

英語の他動詞表現や無生物主語表現についても同じことが言えるであろう。認知的特徴として他動詞表現や無生物主語表現がネイティブ英語的なものとして捉えられる。国際共通英語とは必ずしも合わない。

Thank you for last night. It was a gorgeous night. これは日本語の「先日はどうも～」という言い方である。ネイティブの英語ではしない。だが、このようなことを国際共通英語の立場から教えるのはほとんど意味がない。教養的に英米では言わないと教えるのはいいだろう。むしろ、学習者が会話をする可能性の高い言語話者の国、文化でどのように言われるのかの方が大事であろう。

文法

be going to, will の区別、*must / have to* の区別などの認知的な説明はさほど重要とは思えない。まず、どちらか、できれば両方が使えることであろう。だが、時にスタイル（フォーマリティ）の問題として、前者の区別に言及する必要があるかもしれない。今井（2010: 199）には、次の認知的意味の違いの説明がある：*I found this book informative. I found this book to be informative. I*

found that this book is informative. こうした違いの説明も国際共通英語学習には積極的な貢献はしないのではないだろうか。

認知文法的説明が「うるさい」と思われる例もある。例えば今井 (2010: 179~180) で、動詞の完了用法、未完了用法を名詞の可算・不可算という観点から説明している。認知言語学的には面白く洞察に富む説明ではあるが、学習目的には少々「哲学的」過ぎると思われる。同じく今井 (2010: 137~144) では、時制の理解を「距離」という比喩で考えている。つまり時制を距離感で考えている。だが、過去・現在・未来を考えるのに距離という比喩を考えなくてもすぐわかる。説明を長々としすぎる感じがする。つまり、国際共通英語学習の立場からすると、ネイティブの英語が持つ認知的な深い洞察は不要と思われる。そして、もしそれに振り向ける時間とエネルギーがあれば、それよりもっと実地的なコミュニケーションスキルの練習に使った方が有益であろう。

名詞の *fruit, fish* の数え方は極めて複雑であるが、Lee (2001) は認知言語学的観点から合理的に説明してくれる。だが、やはりこれも国際共通英語学習の立場からは負担過ぎるし、実際の使用では他の通常の名詞と同じ扱いをしてしまうかもしれない。

事物の捉え方

ノンネイティブの文化は英米の文化とは異なる。したがって、ネイティブの文化や事物の捉え方を一方的に規準とすることは国際共通英語の立場とは合致しない。個々の文化が異なるので共通項を見出すことは最初から不可能であるが、かといって英米を規準としなければいけないというのはおかしい。例えば、日本人がインドネシアの人と英語でコミュニケーションしているならば、互いの文化のあり方、事物の捉え方に注目すればいいわけで、その時に英米の文化を仲介させる必要はない。

なお、この捉え方には大きく二つの種類があると思われる。一つは文化的なものである。例えば、贈り物をあげるとき、ネイティブ的には *I hope you like it.* となるが、日本と同じような文化を持つ人々には *Please accept this humble gift. This is a small present for you. Here's a little something for you.* などが好まれるかもしれない。もう一つは、認知的な捉え方である。例えば、英語では *The sun rises in the east.* 「東という場所で」ということになるが、日本語では「東から」と起点になる。この場合は、ネイティブの捉え方に従って英語を使うことになると思われる。

比喩

捉え方の一つである。文化的なものも多い。あまりに英米文化に固有なものは、国際共通英語には不向きである。日本人とインドネシア人との会話を考えると、我々が極めて英米固有の比喩を知っている必要はない、それらを我々が共有する理由はないであろう。比喩には一般的、日常的なものもある (Lakoff and Johnson, 1980)。例えば、TIME IS MONEY メタファーで *Don't waste your time.* というような比喩表現である。このような日常的な比喩については、基本的なものなので国際共通英語にも必要である。だが、その場合田中 (2012) でも指摘したが大体はすぐわかるものが多い。学習者の学習を促すような項目について特に扱えばよいであろう。

2.2.3. 認知言語学の国際共通英語教育への応用の利点

認知言語学の知見を国際共通英語教育への応用がまったく意味がないのかということ、そうでもない。

基本語彙

特に基本動詞、助動詞、前置詞などの認知的説明、認知的意味の学習は、そうした語彙のより深い意味の理解を与えるので、国際共通英語使用において余裕を持たせてくれる。例えば、動詞 *have, take, get, make, go, come*, 助動詞 *be, may, can*, 前置詞 *at, in, on, over* など英語のコアになるよう語については、認知言語学、認知意味論からの成果を学習に利用すべきであろう。こうした基本語彙の意味を、国際共通英語の観点から軽視する理由はない。極めて重要であると思われる。さらに、これらは同時に英語基本文法の学習にもなる。

多義語の学習

多義語は基本語であることが多いので、上記の言及したように認知言語学的アプローチは有意義であろう。

イディオム表現

特に基本動詞と前置詞の組み合わせのイディオム (例: *take off*) に有効である。上記の基本動詞、前置詞の認知的意味を理解していれば、この組み合わせによる意味はかなりの程度推測がつく、したがって学習もしやすい。しかも、この組み合わせのイディオムは極めて多く、生産性が高い。

名詞の可算・不可算の基本的意味

ここでも基本の意味を学習することは大事、認知英文法は役に立つであろう。例えば、Lee (2001) は具体的事物の可算名詞の特徴は形があり内部構造を持つものであり、不可算名詞の特徴は逆に形がなく内部構造を持たないものであると説明している。筆者は後者のことを「金太郎飴」的と学生に説明している。こうした認知的説明は、どうして *paper*, *money* が不可算なのかを暗記ではなくて納得いく形で説明してくれる。したがって、応用力もつくと考えられる。ちなみに、*paper*, *money* はどちらも本来の形を持たないし、内部構造もない、どこを切り取っても *paper* であり *money* である。

だが、周辺の可算、不可算の扱いになると、その認知的説明の重要性は失われるように思われる。例えば、国際共通英語の立場からすると、名詞 *sheep* が可算であるが単複同形であることを覚えることの意味は薄くなると思われる。Lee (2001) は、そこには認知的根拠があり、他の典型的な可算、不可算名詞の意味から動機づけられていると説明はするが、それはかつての狩猟文化を背景としているのである。国際共通英語という枠の中では、「イギリスのかつての狩猟文化」はほとんど意味を持たないのではないだろうか。名詞 *sheep* の奇妙な文法的振る舞いがそのまま許容される必要はないであろう。つまり、国際共通英語では、単数は *sheep*、複数は *sheeps* で十分ではないだろうか。

名詞の可算・不可算性に関連して、不定冠詞 *a* の認知的説明も有益であると思われる。数えられて、聞き手・読み手との間で共有されていない初出のものが *a* で（新情報）、共有されていることがら（旧情報）が *the* で表現されるぐらいの説明だけでは不十分であろう。*a* の機能として、名詞の可算性の問題を拡張して、本来数えられない、数えないものを個別化する、あるいはその種類（の一つ）に着目させる、という役割があることを学習するのは有益であろう。

準動詞：to-不定詞、動名詞、分詞

これらの認知的意味特徴の学習も国際共通英語の学習に問題を引き起こすわけではなく、むしろその学習を促進させるのに役立つであろう。ただ、他でもそうだが、長々とした認知的負担を強いるような説明は控えるべきである。例えば、to-不定詞は未来志向的な意味を持つ。to-不定詞は動詞性が強いが動名詞は事（こと）性が強い。形が同じであるせいか、動名詞は現在分詞との類似性も持つ：*Stop eating. You're eating too much.* などの指摘は国際共通英語学習に利すると思われる。

3. 結び

認知言語学を従来の英米のネイティブ英語の教育に適用する場合は、そのまま適用できるであろう。それがうまく行くかどうかは対象とする英語の問題ではなくて、適用の仕方と言える。この問題は、田中（2012）である程度論じた。だが、学習の対象を国際共通英語とする場合、その適用の仕方はずっと慎重でなければならないだろう。英語の認知言語学は英米のネイティブ英語を対象としており、それは国際共通英語とは異なる。その国際共通英語の特性を理解した上で、適用可能な領域、そうでない領域を区別して英語教育を考案していく必要がある。そうでなければ、学習者に対して、不要な認知的負担をかけたり、英語学習に必要な以上にネイティブ的なものを要求したり、不必要に英米文化・価値観偏重を強いてしまうであろう。

参考文献

- 今井新悟・森山新・荒川洋平, 2009, 「学習辞典編纂のための形容詞ネットワーク記述・試論―「小さい」を中心に―」, 日本認知言語学会第10回大会 Conference Handbook, pp.242-245.
- 今井新悟・森山新・荒川洋平, 2010, 「学習辞典編纂のための形容詞ネットワーク記述・試論―「小さい」を中心に―」, 『日本認知言語学論文集』, 第10巻, pp.344-354.
- 今井隆夫, 2010a, 『イメージで捉える感覚英文法』, 開拓社.
- 今井隆夫, 2010b, 「認知文法を参照した学習英文法設計の観点から、動詞の2つの用法の整理を試みる」, 日本認知言語学会第11回大会 Conference Handbook, pp.180-183.
- 今井隆夫, 2011a, 「認知文法を参照した学習英文法設計の観点から、動詞の2つの用法の整理を試みる」, 『日本認知言語学論文集』, 第11巻, pp.266-276.
- 今井隆夫・宮浦国江, 2011, 「認知言語学を参照した英語学習法」, 認知言語学セミナー（日本認知言語学会主催）.
- 今井隆夫, 2011b, 『英語学習への応用の観点から“Would you give me a wine?”を考察する』, 日本認知言語学会第12回大会.
- 今井隆夫, 2012, 「英語学習への応用の観点から“Would you give me a wine?”を考察する」, 『日本認知言語学論文集』, 第12巻, pp.460-466.
- 大石俊一, 1990, 『「英語」イデオロギーを問う―西欧精神との格闘』, 開文社出版
- 小野尚美・高野恵美子・アレン玉井光江・トム・マーナー, 2007, 「早期英語教育：「ことば」の構造だけでなく学習者が「ことば」をどうとらえるかに注目した英語学習指導法にむけて」, 日本認知言語学論第8回大会 Conference Handbook, pp.124-136.
- 小野尚美・高野恵美子・アレン玉井光江・トム・マーナー, 2008, 「早期英語教育：「ことば」の構造だけでなく学習者が「ことば」をどうとらえるかに注目した英語学習指導法にむけて」, 『日本認知言語学論文集』, 第8巻, pp.587-594.
- 岸本映子, 2003, 「英語教育での名詞の〈数〉に関する指導」, 日本認知言語学会第4回大会 Conference Handbook, pp.59-62.

- 岸本映子, 2004, 「英語教育での名詞の〈数〉に関する指導」, 『日本認知言語学論文集』, 第4巻, pp.88-98.
- 岸本映子・田中茂範・李徳奉・岩田純一, 2006, 「認知言語学と言語教育」, 日本認知言語学論第7回大会シンポジウム Conference Handbook, pp.168-182.
- 岸本映子・田中茂範・李徳奉・岩田純一, 2007, 「認知言語学と言語教育」, 『日本認知言語学論文集』第7巻, pp.533-581.
- 鈴木孝夫, 1999, 『日本人はなぜ英語ができないか』, 岩波新書, 岩波書店
- 鈴木希明, 2004, 「英文法習得への認知的アプローチ—「認知英文法」教材の可能性を探る—」, 日本認知言語学会第5回大会 Conference Handbook, pp.260-263.
- 鈴木希明, 2005, 「英文法習得への認知的アプローチ—「認知英文法」教材の可能性を探る—」, 『日本認知言語学論文集』第5巻, pp.462-470.
- 大学英語教育学会第47回大会, 2008, 「グローバルな英語コミュニケーション能力とは—英語教育再考」.
- 大学英語教育学会第50回記念国際大会, 2011, 「英語教育への新たなる挑戦—JACETのこれからの50年—」.
- 高橋千佳子・金子智香, 2010, 「プロトタイプ理論を用いた英語前置詞の実践的授業」日本認知言語学会第11回大会 Conference Handbook, pp.177-179.
- 高橋千佳子・金子智香, 2011, 「プロトタイプ理論を用いた英語前置詞の実践的授業」, 『日本認知言語学論文集』第11巻, pp.256-265.
- 田中 実, 2012, 「学習者のための認知英文法の問題点」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第23巻第1号, pp.71-92.
- 千葉宏之, 2006, 「ライティングテストにおける英語学習者の応答の認知言語学的分析」, 日本認知言語学論第7回大会 Conference Handbook, pp.64-67.
- 長加奈子, 2011, 「認知言語学に基づく英語前置詞教授法とその効果の検証」, 日本認知言語学会第12回大会.
- 長加奈子・川瀬義清・大橋浩, 2012, 「応用認知言語学—教育現場への応用に向けた展望とその課題」, 大学英語教育学会第51回国際大会.
- 津田幸男, 1991, 『英語支配の構造—日本人と異文化コミュニケーション』, 第三書館.
- 鳥飼玖美子, 2011, 『国際共通語としての英語』, 講談社.
- 本名信行, 2003, 『世界の英語を歩く』集英社新書, 集英社.
- 本名信行・竹下裕子・James D'Angelo, 2012, 『グローバル化社会の英語を考える』, 金星堂.
- 松本敬子, 2004, 「多様な認知能力に支えられた概念習得の側面から見た言語学習」日本認知言語学会第5回大会 Conference Handbook, pp.256-259.
- 森本智・堀江薫, 2006, 「日本人英語学習者による英語の関係詞節習得：主文動詞句の処理能率の観点から」, 日本認知言語学論第7回大会 Conference Handbook, pp.60-63.
- 森本智・堀江薫, 2007, 「日本人英語学習者による英語の関係詞節習得：主文動詞句の処理能率の観点から」, 『日本認知言語学論文集』, 第7巻, pp.12-22.
- 吉川寛・日野信行・松田文・石川有香, 2011, 「英語教育と文化—異文化コミュニケーション能力の養成—」, 大学英語教育学会第50回記念国際大会, pp.137-142.
- Crystal, David. 2004. *The Language Revolution*. Cambridge, U.K.: Polity Press.
- Kachru, Braj. 1986. *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes*. Chicago:

- University of Illinois Press.
- Kachru, Braj. 1992. *The Other Tongue: English across cultures*. 2nd Ed. Urbana: University of Illinois Press.
- Lakoff, George and Johnson, Mark. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Matsuda, Aya. 2011. "Teaching English as an International Language: FAQs" *JACET the 50th International Conference*, pp.43–49.
- Yano, Yasutake, Joseph Lo Bianco, Mae-Ran Park, and Nobuyuki Honna. 2011. "Language policies in foreign countries—their achievements and problems—What can we learn from them?" *JACET the 50th International Conference*, pp.134–136.